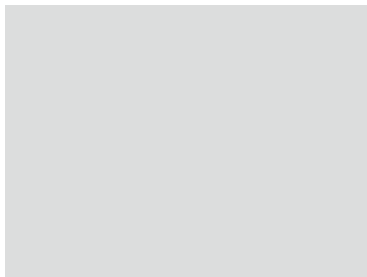


音楽
と
美術

この1枚



《親猫・子猫》1949年 油彩、カンヴァス
55.0x75.0cm 世田谷美術館蔵
©Karel Appel Foundation c/o Pictoright Amsterdam
2017 C1455



Karel Appel /
Musique barbare
Sub Rosa 2016年 (CD)
LPをCDで再発。絡まったテープを頭からかぶって叫ぶアペルの異様な姿を撮影したのは同郷の写真家のエルスケン。彼の短編映画「Karel Appel, Componist」はYouTubeで視聴できる。

カレル・アペル

《親猫・子猫》

生の喜びに満ちた絵画と音の洪水

画家のカレル・アペル（1921年～2006年）はオランダのアムステルダムに生まれた。仲間のクリスチャン・ドートルモンやアスガー・ヨルンらとともに、1948年にCOBRAを結成する。グループ名はそれぞれの出身地の首都、コペンハーゲン、ブリュッセル、アムステルダムの頭文字から取られた。

アペルは、ジャン・デュビュッフェの「生の芸術」に触れて衝撃を受け、意識して、子供の絵のように自由で、描く喜びに満ちた作品を制作した。それは戦後の美術界が抽象的で難解な傾向にあったアンチテーゼでもある。とくにオランダではモンドリアンの幾何学的抽象に対する反発は大きかった。

《親猫・子猫》はコブラ時代の作品。アペルのモチーフにはなぜか猫が多い。猫と一緒に写真も残されているため、愛猫なのかもしれない。原題は「Parents

with Albino」だから、正確には《アルビノの子猫とその両親》となる。アルビノは先天的にメラニン（色素）が欠乏する遺伝子疾患。白猫には赤い目が多く見られるのはそのためで、猫のアルビノは自然界では滅多に見ることができないほど珍しいらしい。

驚くべきことに、アペルは実験音楽にも挑戦し、1963年にLPを発表した。師と仰ぐデュビュッフェもまた音楽作品を残したが、ここではティンパニーやオルガンのほか、ユトレヒト大学の電子音楽スタジオで制作したテープ音楽も収録し、彼の奔放な音の洪水を体験することができる。

世田谷美術館 学芸員 矢野 進

担当した主な展覧会に、「瀧口修造と武満徹展」、「植草基一／マイ・フェイヴァリット・シングルス」、「東宝スタジオ展 映画＝創造の現場」、「花森安治の仕事」など。

音楽
と
本

この1冊



『一絃の琴』（宮尾登美子著）
1978年10月 講談社
第80回直木賞受賞作

宮尾登美子

『一絃の琴』

ヒロインの生き様に重なる琴の音

宮尾登美子が描く女性たちは、さまざまな境遇にさらされながらも、力強く生き抜いていきます。『一絃の琴』もまた、古典芸能「一絃琴」を巡る対照的なヒロイン二人の生涯を描いた作品です。

一人目は、五歳で旅絵師の弾く琴の音に魅せられた土佐・上氏の娘、苗。彼女は松島有伯に弟子入りし、厳しい修行の日々を送り、腕を上げていきます。有伯の死後、彼への恋心に気づき想いを残しながらも、苗は武家に嫁ぎますが、夫とは死別。その後は亡くなった妹の夫と連れ添うことになり、妻・嫁の仕事にひたすら務め、姑を看取ったあとに、夫の協力を得て再び琴に向かいます。苗は子宝には恵まれませんでしたが、琴の塾を開き、多くの弟子たちを育て世に送り出しました。

もう一人のヒロイン、苗の弟子の蘭子は、たぐいまれなる才能により、苗の塾を継ぐものとされていましたが、苗が養

女を迎えて継がせたためにショックを受け、琴から離れてしまいます。苗の死後、再び琴を弾き無形文化財にも認定されるまでになりますが、誇り高く他者を寄せ付けぬ彼女のあとを継ぐ者はおらず、蘭子の琴は永遠に封印されます。

宮尾登美子の小説は、作家が紡ぎだす芳醇なことばを浴びるように読むのが醍醐味です。

『一絃の琴』もまた、ヒロインたちの人生に寄り添った濃密な物語を堪能できます。作品全編にわたって響きわたる彼女たちの琴の音は、読後も豊かな余韻を残すことでしょう。

世田谷文学館 学芸員 中垣理子

7月15日～9月18日「山へ! to the mountains展」開催中。9月16日・17日は「山」をテーマにした「セタブン・マーケット2017」も開催します。内容はHP等で、随時お知らせします。詳細はお問い合わせを。Tel.03-5374-9111 <http://www.setabun.net>